

念願の兄弟での初優勝

最終 18 番でイーグル決着

《九州ジュニア 15～17 歳の部男子》

通算 11 アンダー 133

長崎 煌心（宮崎・日章学園高 2 年）



お兄ちゃんの面目を保った。約 1 時間半前、弟・大星はすでに 12～14 歳の部男子の初優勝を決めていた。「弟には負けられない」。戦いは同組の日章学園高の 1 学年上の先輩・丸尾怜央とのマッチレースとなった。

最終日を 1 打リードでスタートしながら、前半のアウト終了では逆に 3 打のビハインド。インに入って 10、15 番でバーディーを奪って 17 番終了時点でその差は「1」になっていた。「最後、丸尾さんはバーディーで来るのでイーグルしかない」。18 番ロング（530 ヤード）は比較的バーディーの取りやすいホール。長崎煌の第 2 打はピンまで 276 ヤード。これを 3W でピン右 9m に 2 オンする。ただ、難しい下りのフックラインが残っていたが、「ジャストライン」と自画自賛のイーグルパットが決まる。丸尾はバーディーを奪えず、長崎煌の初優勝が決定した。

「ずっと兄弟で優勝したいと思っていました。最後のパットは自分ではないようでした。」

丸尾先輩はさすがに強かった。先輩に勝てて嬉しい」と弟と同大会初の同時優勝に喜びをかみしめる。これまで2021年全国中学校ゴルフ選手権や昨年の九州ジュニア2位タイなどの実績があるが、「強さ」という点では弟の方が先行していた。同じ距離でプレーするこの大会で兄は弟に5打差もつけたのである。

ゴルフは父と祖父の影響で5歳から始めた。出身は宮崎市。ローリー・マキロイに憧れ、プレー的にはコリン・モリカワを参考にする。身長176cm、体重75kg。

ボールには世界に飛ばたくように地球のイラストの上に「世界の長崎」の文字。将来、プロ選手になる前にアマではナショナルチーム入りを目指す。そのために「日本ジュニアでは優勝したい。とにかく日本のタイトルを取りたい」と意気込む。

狙って奪取した初優勝

兄同様最終 18番でケリ

《九州ジュニア 12~14歳の部男子》

通算6アンダー 138

長崎 大星（宮崎・日章学園中3年）



弟のメインステージも18番だった。たまたまだろうが、兄弟の同一大会で同時優勝には

ふさわしい舞台となった。こちらは17番終了時点で一騎打ちの相手となった三明優太（福岡・沖学園中3年）と5アンダーで並んでいた。セカンドはピンまで240ヤード。2オンを狙った一打はグリーン手前の右バンカーにつかまる。それを2mに寄せた。先に打った三明のパーパットが外れ、長崎大が冷静に沈めてバーディー。2打差での栄冠となった。

「（九州沖縄中学校）春季大会は2連覇しているのに、この大会は勝てなかった。絶対勝ちたいところで勝って本当に嬉しい。全力でいきました」。最後は雨中での決着となり、長崎大はずぶ濡れの顔をほころばせた。勝利への意欲の理由はもう一つある。今年6月の日本アマに出場した長崎大は9オーバー49位タイと不本意な成績に終わった。兄の煌心にも1打負けた。「緊張して悔しい思いをした。30cmが入らなかったし、トップ10にもなれなかった」。今シーズンは2番目が多い。5月の九州アマで銀メダル、九州オープンでもプレーオフで敗れてセカンドアマ、世界ジュニアでも2位。「勝てたと思ったら、インドの選手が優勝。この悔しさを晴らそう」と臨んだ大会でもあった。

弟も兄と同じようにユニークなボールを使う。文字は「ビッグスター」。こちらも世界的なプレーヤーを夢見る。

将来の目標は「高3でのプロ」。大学進学は考えておらず、高校3年でのプロテスト一発合格を目指す。そのためにもプロのトーナメントや下部ツアーに出場して経験を積む。日本ジュニアは通過点に過ぎないが、狙うは兄同様に頂点である。

満足いくプレーで初優勝

競技初の60台をマーク

《九州ジュニア15～17歳の部女子》

通算7アンダー 137

仲村 梓（エナジックスports高2年）



【写真は優勝の仲村[Ⓔ]と同じエナジックスports高で15～17歳の部男子で3位の呉屋】

ホールアウトした仲村はニコニコである。大満足のラウンド。5バーディー、ノーボギーの67。競技では初の60台で、もちろん自己ベスト。さらに、競技では初のノーボギーのプレーとなった。インスタート。1ホール目の10番で30cmにつけてOKバーディー。12、18番では2～3mを沈めてインを3アンダーでターンすると、アウト1番では10ヤードをチップイン、5番でもスコアを1つ伸ばして5アンダー67である。

「ショットの距離感が良く、ほとんど2～3mについた。グリーンを外したのは10番の1ホールだけ。緊張感もなく、楽しく回れた。来年のシードを取りたかったし、優勝を目指していました」

ショットの好調さはスイングを調整したこと。「調子が良くなかった。縦振りになっていたのをコーチから『ちょっと横振りに』と改善された。自分的にはその方が合っている」。さらにパットにも手を入れた。「パットのうまい後輩に教えてもらった。それまではラインを合わせていたけど、目印を見つけて打つようにしたら良くなりました。パットが良くなると、ショットも良くなる。ミスしてもいいかな、と」。プレーに余裕が出たのである。

今夏の高校野球沖縄県予選でエナジックスports高は快進撃を続け、決勝進出。決勝戦では惜しくも興南に敗れたが、旋風を巻き起こした。仲村のクラスメートに野球部員が5人おり、優勝戦は彼女たちも応援に駆け付けた。

「負けてみんなで泣きました。全国大会では野球部のためにも頑張ろう、と思います。上位入賞を目指します」と語った。

このクラス初の2連覇 2日連続のアンダーパー

《九州ジュニア12～14歳の部女子》

通算4アンダー 140

廣吉 優梨菜（福岡・折尾中3年）



ただ一人2日間を通じてアンダーパー。2位に5打差の通算4アンダー140での2年連続優勝。女子の部は2008年までは中学生と高校生が一緒に争っていたが、翌2009年より独立。それ以来、連覇は今回の廣吉が初めてとなる。

「嬉しいですね。頑張ってバーディーをいっぱい取ろう、と思っていました。去年よりいいスコアで回ろう、と」。中2の昨年は73・71のパープレーで制した。今回は昨年より4打も上回った。計算通りである。

インスタート。13番で2mのバーディーパットを決めると、14番でOK、16番は15ヤードを50度のウエッジでチップイン、17番でもスコアを伸ばしてインは4バーデ

イー、ノーボギーの32。本人の言葉通りのバーディーラッシュだ。ただ、アウトの上がり17、18番で連続ボギーを叩いたのが気に入らず「しまりが悪い」と少しだけご機嫌斜めでのホールアウトとなった。

今大会の前週には女子プロツアーの「大東建託・いい部屋ネットレディス」(ザ・クイーンズヒルGC、福岡県糸島市)に出場。「攻めすぎて」と通算5オーバーで予選落ちしたが、プロとのラウンドで得るものも多かった。ラウンドは飛ばし屋の穴井詩と永嶋花音。「穴井さんは飛ばし、悪そうに思っているも4アンダーくらいで回って来る。落ち着いています。今後も機会があったらツアーに出たい。できたら岩井千怜さんと回ってみたい」と夢を膨らませる。

自分の性格を「調子に乗るタイプ」という。「乗ったらバーンと行くが、悪いと(ボールが)危険な方へ行く」。日本ジュニアを「中学最後だから優勝を目指したい」。勢いがついたときの廣吉に期待である。

《あつまる阿蘇赤水GC》



